

## 英文学読み直し (2)

—— Lady Mary Wroth : “O mee : a lover I have binn” ——

小 柳 康 子

### Part I

#### I

17世紀のはじめ、多分1611年か1612年に書かれた、作者不詳の acrostic sonnet がある。

Love, Birth, State, Bounty and a Noble mynde  
assume in you a happie residence  
disposing all your Actions to their kinde  
ynspir'd to you by Vertues influence

Marvell not Lady then that Men distrest  
and such whom fortune and the world doth scorne  
repayre to You, since in your Noble brest  
ympressions of a Poor mans cares are borne

With you ther is a happines of fate  
reaching att that to which Your hope aspires  
over Your life guidinge your Honor'd state  
to tyme, to fortune and Your high desires  
how Nobly then sitts Vertue in your brest  
Richer adorn'd then is by mee exprest.<sup>1</sup>

最終行を除く 1-13行の文頭の語を並べてみると、Lady Mary Wroth の名前が現われ出る仕掛けのこのソネットには、男性詩人の、Lady Mary

Wroth という身分の高い女性に対するあからさまな賛辞——パトロン Wroth へのへつらい——が満ち満ちている。このソネットを捧げられた Lady Mary Wroth はまた、次の詩からもわかるように、エリザベス朝ルネサンスが哀惜の念をもって記憶する名前—Sir Philip Sidney—の家系に連なる女性であった。

Although I knowe None, but a *Sidney's* Muse  
 Worthy to sing a Sidney's Worthyness :  
 None but your Own *Al-WORTH* Sidneides  
 In whom, he *Uncle's* noble Veine renews<sup>2</sup>

「英文学読み直し」の第2回目の本稿で取り上げる女性は、これらの詩をはじめとして多くの詩人にうたわれた Lady Mary Wroth (?1587-1653) である。彼女はルネサンス宮廷人の華といわれた Sir Philip Sidney を伯父に、その精神的双生児とも言うべき妹 Mary Sidney, Countess of Pembroke を伯母にもつ。父は Philip の弟 Robert Sidney である。

Lady Mary Wroth を語るとき、必ず言及される次の三つの事柄がある。

- 1) Wroth は、イギリスにおいて、真の意味でまとまりのある prose fiction——ロマンス——を書いた最初の女性である
- 2) Wroth は、イギリスにおいて、世俗的愛をテーマにした sonnet sequence——ソネット連作——を書いた最初の女性である。
- 3) Wroth は、ルネサンス期イギリスの名家 Sidney 家の一員である。

この三つの事実は、英文学における Lady Mary Wroth の位置を示すものとして少なからぬ意味をもつのは言うまでもないであろう。そしてここから、「英文学読み直し」という形で女性の書き物を考えるとき、その核心となる次の問題が引き出されるのである。(数字は上にあげた 1 から 3

に対応する。)

- 1) ルネサンスにおいて人気のあった文学ジャンル——ロマンス——は、女性に大いに読まれたが、作者は男性であることが当然とされていた。時間と空間を自由に移動し、現実と超現実のはざまを行き来する戦いと恋の物語であるロマンスは、女性が書くものとしてふさわしいジャンルとはみなされていなかった。<sup>3</sup> これを女性が書いたとき、いかなることが起こり、その内容に性による差異は出てくるだろうか。
- 2) ソネット連作は、Petrarch の *Canzoniere* に端を発し、ルネサンス期イギリスで Sir Philip Sidney が *Astrophil and Stella* を書いた後、短期間に爆発的に流行した。これも男が書くものとされ、読者には男女が想定されている。ソネット連作は、冷たく貞節な女性に報われぬ愛を捧げる恋人—詩人とその女性の、hegemonistic な関係（もちろん男性>女性）を基に据えた Petrarchan love をうたうものである。これを女性が書いたとき、Petrarchan love はどのような形になるのか。Petrarchan love は覆されるのか、それとも無傷のままに残るのか。そしてここから見えてくるものは何か。
- 3) Wroth が Sidney 家の一員であるということは、ルネサンス期イギリスにおいてどのような意味を彼女に与えたのか。それが文学的使命の自覚というものと関わるとすれば、ルネサンス期イギリスにおける Sidney myth がイデオロギー的に形成されて行く過程あるいは操作の中で、創作するという行為が一人の女性の中でどのように捉えられていったのかが明らかになるのではないか。

そして、これら 1～3 の問題に加えて、前稿でも触れた、創作をしそれを世に出した女性が、どんな反応を受けそれにどのように対応したのかという、大きな問があることは言うまでもない。本稿では、ソネット連作

*Pamphilia to Amphilanthus* を取り上げ、これらの三つの問題のうち 2 と 3 について検討する。1 については、筆者の資料収集状況と、これを考えるうえで大きな枠組みとなる「ルネサンスのロマンス」についての研究・準備不足状況からみて今回は論じずに残しておき、稿を改めて検討したい。<sup>4</sup>

## II

Lady Mary Wroth のソネット連作を検討する前に、3 の問題から始めよう。Wroth の生涯をたどることは、その生を静的なコンテクストの中に置いて、彼女についての知識を得ることを第一の目的にするものではない。それは、ルネサンス期イギリスを生きた一人の女性が、時代との距離のないようにみえる Sidney 一族と言うファミリーの中で、どのように作られていったのかを、エリザベス朝からジェームズ朝へと変貌してゆく社会との関わりのなかでみてゆくことである。Lady Mary Wroth の生涯は、歴史と文化と個人の交錯する舞台として極めて興味あるテーマを我々に与えてくれる。このとき、Stephen Greenblatt のルネサンスの “self-fashioning” の議論から抜け落ちているジェンダーを視野の中にいれた女性の “self-fashioning” が現われ出ることになるのである。

Lady Mary Wroth は、Sir Philip Sidney の弟 Robert Sidney と Barbara Gamage の第一子として、1586年か1587年の10月18日に誕生した。生年が二説あるのは、Penshurst 教区の記録に載っていないためであるが、日付は、Robert がオランダでの外交官の公務で不在の間、家のマネジメントを託した Rowland Whyte の手紙にはっきりと記されていることから正しいと考えられている。<sup>5</sup> 1586年にせよ、1587年にせよ、この生年月日を Sir Philip Sidney のオランダでの死——1586年10月17日——と並べてみれば、そこにある coincidence を感じさせるのは確かであろう。ルネサンス期イギリスのヒーローとして祭り上げられてゆく伯父のまるで身代わりでもあるかのように、Wroth はこの世に生まれ出たのである。

Sir Philip Sidney は、ルネサンス期イギリスの宮廷人、政治家、軍人、詩人として、Elizabeth 女王のもとで伸長する国力と歩調を合わせるように時代を駆け抜け、32歳の誕生日をむかえる直前、オランダで戦死する。彼の生涯には、華やかなルネサンス人の典型という後世のイメージとは裏腹に、宮廷人としての挫折と暗い衝動が成功の陰に渦巻いているのだが、それは特にソネット連作 *Astrophil and Stella* の内容に複雑な影を落としている。しかし、カトリック国スペインの4500人の敵を相手にわずか600人で挑むという無謀とも見える戦いの結果もたらされた早すぎる死によって、彼が時代のヒーローとなるのは必然の成り行きであった。

1586年10月に死んだ Philip Sidney の葬儀が、翌年2月になって行われたことに注目して、そのページェントとしての葬儀と死を悼むエレジーのディスコースに、体制側のイデオロギー保持への欲望とロンドン市民に代表される新しい中産階級の価値のせめぎあいをみ、“new mode of subjectivity” の形成を指摘する Ronald Strickland の “Pageantry and Poetry as Discourse : The Production of Subjectivity in Sir Philip Sidney’s Funeral” (1990) は、ルネサンス期イギリスにおける Sidney myth を、Wroth の生と重ね合わせて考察する際に重要な示唆を与えてくれるように思われる。

The increasing active role of commoners in aristocratic funeral discourse—whether as (more or less independent) writers and readers of the texts or as participants in the events—at once contributed to and reflects the changes which produced the modern “subject as autonomous individual.” Thus, it appears, mainstream, even propagandistic, discourse—such as funeral pageantry—as well as more marginal discourse—such as the Elizabethan theatre—can function as sites for the production of alternative modes of subjectivity and as sites for social change.<sup>6</sup>

ここでは、Sidndy の葬儀が、aristocracy と bourgeoisie の両方が発現す

る場としてはからずも機能したこと、また、そこには「自律した個人としての主体」の生成されてゆく歴史的変化が見られることが述べられている。Sir Philip Sidney は、中世的封建制度の残滓を残しながらも近代的市民社会へと変貌してゆく時代の中で、ルネサンス期イギリスの理想像として、人々に記憶されてゆく。国王(女王)の忠実な臣下として、プロテスタントの代表として、そしてなにより、貞節で高貴な女性へ一途な愛を捧げる男性詩人として。Wroth の生涯を辿るとき考慮に入れるべきは、このような歴史的場において、どのような作用が「ものを書くこと」の自覚を促したのかということであるのは言うまでもない。

この Sidney myth とよんでもよい目に見えないひとつの規範はまた、Sidney の死後に彼の詩を改定出版する妹 Mary Sidney, Countess of Pembroke の姿を通して、さらには、兄のあとをたどるように政治の表舞台で生き、詩を残した父 Robert Sidney の姿を通して、Wroth に直接的に感じ取られていった。

Sir Philip Sidney の妹 Mary Sidney, Countess of Pembroke は、優れた知性と兄に劣らぬ文学的才能に恵まれた女性であった。彼女が Philip の死後、Wilton House と呼ばれた自宅で、様々な文学者を招いて一種のサロンを形成し、彼ら多くのパトロンとなって、ルネサンス文学に大きな影響を与えことはよく知られている。<sup>7</sup> また彼女は、従来強調されてきたこのパトロンとしての役割のほかに、自らもペンを持ち、兄の二つの *Arcadia* の改定をし、Petrarch やフランス悲劇の翻訳、Psalms の翻訳などをおこなった女性であった。Wilton House に集まる文学者達と知り合うには幼なすぎた Mary も、伯母や見たことのない伯父の、時代とともにある存在の大きさは自覚していたに違いない。

卓越した兄と姉の下で、文学的には従来ほとんど注目されて来なかった Robert Sidney も、やはり Sidney 家の一員として作品を残している。兄の死後ルネサンス期イギリスの宮廷で重要な役職についてゆく Robert は、

兄をみない詩を書いていったらしい。Robert の詩は、生前出版されることはなく、綴じた一冊の形に纏められた manuscript が発見されたのは 1973 年のことであった。Robert は、ソネット、ソング、パストラル、エピグラム、エレジーなどをほんの数年間という短い期間に書き、それらを Countess のもとに残しておいた。<sup>8</sup> Robert の詩人としての評価は兄や姉のように高くはないが、彼も詩作を通じて、また宮廷での活躍を通じて、Wroth に大きな影響を与えていったのである。

Wroth はこのように、Philip, Countess of Pembroke, Robert という直系ファミリーが、時代と距離のない場にいることを感じながら成長していった。言葉を換えて言えば、Wroth は、ルネサンスの文学におけるキャンノンに自らつながっていることを強く意識していたということである。そしてこの意識が彼女に Philip の使用したジャンルのロマンスとソネット連作で創作することを促したのであった。キャンノン意識と結び付いた Sidney myth は、ひとりの個性的な女性詩人を生み出すものとして機能したのである。

だがこの Sidney myth を別の角度から眺めるとき、我々は、それがジェームス朝において、Ben Jonson をはじめとする詩人たちに Wroth への dedication という形で利用されていくに至ることを知る。James I の妃 Queen Anne の極めて親しい宮廷女性として権力のただ中にいた Wroth は、文学パトロンとして多くの dedication を受けるようになるのだが、彼女がそこにみたものは、Sidney myth を出世の手段に利用して、キャンノンに連なろうとする男性詩人の姿であった。<sup>9</sup> *Astrophil and Stella* の中の女性に向けられたのと同じイメージで限りなく非実体化されてゆく自己を前にして、詩を作ることが、権力や出世への欲望と分かちがたく結び付いている宮廷において Sidney myth の内包する真の意味を Wroth が認識していったと考えてみたい。しかも、この James I の宮廷は、James I, Queen Anne という二人の権力者(この力関係は必ずしも James I > Queen Anne という安定

を保てなかった)を頭にいただき、多くの女性が Queen Anne のまわりに親しいサークルを形成していたことから解るように、Elizabeth 朝の、女王>男性臣下という一元的な安定が崩れ、ジェンダーと役割を介在させて権力構造の多層化あるいは流動化が始まりつつあった世界であった。Lady Mary Wroth の詩と生涯をこのようなコンテクストの中で考えるとき、女性の書き物の継続的な読みつづけが、英文学のキャノンを新たな地平から眺めることにつながり、それを我々の今にとって魅力にあふれた学問として再生させることになるのだということが理解されるであろう。

### III

Wroth の父 Robert Sidney は、Elizabeth と James I の宮廷で重きをなし、ジェームス朝で Viscount de L'sle and Earl Leicester となった。妻 Barbara との間に Wroth を頭に11人の子供をもうけ、人生のかなりの期間を妻子と別れてオランダで過ごした Robert は、残されている手紙や記録によれば、妻を愛し、子供を気遣う良き家庭人であったらしい。

世紀の改まった1600年、この Robert の Penshurst の館を晩年の Elizabeth が行幸する。若き Elizabeth の寵臣であった伯父 Earl of Leicester が、Kenilworth で女王をもてなしたほどのスペクタクルではなかったにせよ、この Penshurst 行は、Robert とその家族にとって大きな誇りであったろうことは容易に想像がつく。妻 Barbara と Wroth をはじめとする家族は、ダンスをして女王をもてなした。彼女はその後さらにあと1度女王の前でダンスを披露する機会のあったことが伝えられている。<sup>10</sup>

父と離れて過ごすことが多かったとはいえ、幸福な少女時代を送った Wroth は、1604年裕福な地主の息子 Robert Wroth と結婚した。James I により結婚の前年 knight の称号を授けられていた夫 Robert は、文学的素養のほとんど無い男性で、その本領ははむしろ、狩猟などの外向きの活動にあった。彼は、James I とその息子 Prince Henry が狩りに出かけるときの



同行者であり、自分の広い地所には、王と王子がたびたび滞在して狩猟を楽しんだことが記録に残されている。<sup>11</sup> しかし、この狩猟を通した王へのもてなしは、Wroth 家に多大の出費を強いるものであった。王の楽しみを損なわないための努力が財政逼迫を招いていることを実に率直に当の王の妃 Anne に手紙の中で語る Wroth に我々は、ジェームス朝の錯綜した権力構造の一端を見ることができる。Wroth はその中で出費が嵩むのは “by letting the deere feede in his best ground, to which by his lease hee is nott bound, but is content rather to lose a hundered pounde a yeere, then to trouble them, least itt might hinder the Kings sporte.”<sup>12</sup> と伝えている。すなわち「王の狩猟の楽しみを損なわせないように、地所の最も良い土地に多くの鹿を放し、毎年100ポンドもの出費を厭わない」James I の臣下 Robert の実情を。“least itt might hinder the Kings sporte” という Mary の言葉に、James I をもはや絶対的な権威とみなしてはいないかすかな響きを聞くように思うのは間違いではあるまい。さらにこれを、狩猟という記号を通じて結び付いている王と夫の関係が、Queen Anne をとりこんだ女性の眼から正しく読み取られ始めていることの証明であるとみなすのは、大胆な仮説だろうか。

#### IV

父と夫が国王と取り結ぶ関係の恩恵を受けて、Wroth は、結婚後間もなく Queen Anne の inner circle の一人として宮廷に入って行った。ジェームス朝の宮廷では、Queen Anne と宮廷女性を中心にした仮面劇——マスク——の上演が盛んであったが、これは極めて政治的なパフォーマンスであったのは言うまでもないだろう。仮面劇に出演することは、時の権力の中枢に連なることを意味したが、Wroth は、1605年の Whitehall における Ben Jonson の *The Mask of Blackness* をはじめとして、いくつかの仮面劇に参加することになる。この *The Mask of Blackness* は、出演した女性た

ちが、Queen Anne の発案で顔と腕を黒く塗って現れたことにより、センセーションを巻き起こしたもののだが、王妃の仮面劇を、宮廷における権力の subversion という観点から論じた刺激的なエッセイである Marion Wayne- Davies の “The Queen’s Masque : Renaissance Women and the Seventeenth-Century Court Masque” (1992) は、このマスク、さらにはマスクそれ自体のもつ意味を、次のように分析している。

The Queen is characterised not only by her sovereignty, but also by her gender ; thus, she may dislocate her royal identity from that of the King in a bilateral challenge to masculine authority. Anne’s self-conscious manipulation of her subject role is evident from the history of her political intrigues and from her dominant control of the masque’s thematic content. . . . By calling upon this pan-chronological symbol of blackened faces—with its magical power of complete ludic aptness—the 1605 masque breaches the ideological constructs of the Jacobean court. It becomes impossible to perceive Queen Anne’s court masques as defined by a simple dialectic power structure. The web of subject relations is too complex and multi-dimensional for that. The masque exists at a point of convergence for many lines of interpretation: of gender, of class, of politics, of artistic construction, and of the carnivalesque.<sup>13</sup>

ここからも明らかなように、ジェームス朝におけるマスクには、王妃のイニシアティヴが働くことによって多層的な意味が付随していた。そして Davies の言及にはないが、王妃がマスクに積極的に関わる過程は、宮廷というパブリックな場所にプライベートなものが侵入し始める過程と平行に進行していったのではないだろうか。このとき我々は、James I に始まる王権神授のドグマが、それを覆す内からの響きに脅かされているのを知るのである。それは、遠からぬ先に到来する市民社会の予兆であった

と考えることは、あながち間違いではないであろう。

## V

Lady Mary の宮廷女性としての生活は、1614年の夫の死を境にしてドラマチックに変化してゆく。待ち望んでいた息子の誕生から、わずか1ヶ月後のことであった。夫は、返済しきれぬほど莫大な借金を残し、また一人息子も2年後に死ぬという個人的な悲劇と並行して、Wroth は、多分自ら選り取った決断が引き起こしたスキャンダルにより、Queen Anne の不興をかい、宮廷の華やかな表舞台から去ってゆく。彼女のスキャンダルとは、Mary Sidney, Countess of Pembroke の長男、すなわち実の従兄弟である William Herbert, Earl of Pembroke と関係を結び、2人の子供を産んだことである。William Herbert は、Shakespeare のパトロンとして有名であるが、様々な女性との恋愛ざたによっても宮廷の噂のまとの人物であった。

当時の宮廷においては、このような行為は格別に不道德なものではなかったと考えられるが、それではなぜ Wroth は Queen Anne から遠ざけられたのだろうか。結婚している男と関係したからか？ 私生児を産んだからか？ 従兄弟と関係したからか？ 理由を示す手紙や文書が残されていないため答えは推測するしかない。当然予想される宮廷での女性同志の葛藤を除いて考えられることは、Wroth が夫と死別した後再婚しないままの未亡人でいたことであろう。Linda Woodbridge のルネサンスの文学における女性観の詳細な研究 *Woman and the English Renaissance: Literature and Nature of Womankind, 1540-1620* (1986) が示すように、当時は、未亡人という存在は lust と結び付き、しかもこれが女性の権力を求める闘争の表現であるとみなされていた事実と関係があるかもしれないことだけを指摘しておく。<sup>14</sup> どんなに乱れた性道徳をも許すように見えていた上流階級が、一転して個人を指弾するようになる多くの例を、我々はこの後数多

く目撃することになる。

子供を作り、宮廷から遠ざかることになった後も、Wroth は、決して隠遁生活に入った訳ではなく、多くの友人や親類と交わり、活動的に過ごした。だがその後半生は、借金の返済に追い立てられるものだったと言われている。イギリスにおける女性を書いた最初のロマンスである *The Countess of Montgomery's Urania* を1621年に出版したのが、経済的な理由によるのではないかと指摘する批評家がいるのもこのためである。<sup>15</sup>

Queen Anne の宮廷から遠ざかり、私生児を産み、借金に苦しみながら、1610年代の後半に、Wroth は、自分の Sidney 一族の文学的ルーツを証明したいという情熱に駆られるようにロマンスの創作にとりかかる。この作品は彼女の2人のこどもの父親の William Herbert の弟である Philip Herbert, Earl of Montgomery の妻で Mary の親友でもあった Susan Vere, Countess of Montgomery の名前をその題名に持っている。これだけでなく、title-page に印刷された言葉から、Sidney myth を宣伝の材料にしようという意図がありありとわかる。それは次のような Wroth の家族関係の羅列を掲げていた。

The Countesse of Mountgomerie's *URANIA*. Written by the right honorable the Lady MARY WROTH. Daughter to the right Noble Robert Earle of Leicester. And Neece to the ever famous, and renowned Sr. Philips Sidney knight. And to the most exelent Lady Mary Countesse of Pembroke late deceased.<sup>16</sup>

I で述べたように、今回は *Urania* については検討しないが、この本の出版がよびおこした騒動に、ルネサンス期イギリスにおいてももの—しかもロマンス—を書く女性がどのように見られていたのかが窺われるので、この経緯を説明してみたい。<sup>17</sup>

*Urania* は、Pamphilia という女王の Amphilanthus に対する愛の物語で

あるが、多くのロマンスと異なり、Wroth 自身と家族、また当時の実在人物をその中に読み込める仕掛けになっているといわれている。このようなジャンルの作品—roman à clef—は、この当時流行し、作品中の登場人物と実在の人物とを結び付ける *clavis* あるいは *key* を参照しながら楽しまれた。*Urania* の *key* は見つかっていないが、roman à clef に近いという見方をされていたらしい。1621年 *Urania* が出版されるとすぐ、Wroth は、Edward Denny, Baron of Waltham によって、彼と、結婚した娘の不倫をめぐる家族内の揉め事がサブプロットの中に悪意を持って描かれているという非難を浴びせられた。現代の名誉棄損の訴えを思わせるこの事件は、Lord Denny と Wroth の間の激しい言葉の飛び交う手紙の応酬という形で進行した。自分の無実を主張する Wroth はしかし、発売後間もなくこの作品の出版さし止めを依頼せざるを得なくなる。これが *Urania* 出版をめぐるスキャンダルの概要であるが、これをめぐっては、幾つかの考えるべき問題点がある。たとえば、roman à clef というジャンルが *Urania* のロマンスとしての内容とどのようなかかわりをもつのかとか、当時の manuscript と出版業者の関係などがそれであるが、<sup>18</sup> これらは *Urania* をジェンダーを中心にして稿を改めて論じる際に検討してみたい。

ここでは、Lord Denny と Wroth の間に交わされた手紙を引用しながら、女性の書き物とそれを出版することの内包する意味を考えてみる。Lord Denny の非難は、恐らく女性がロマンスを書き出版することへの、男性からの反論というコンテクストでみる必要があるだろう。彼は、次のような言葉を Wroth に送った。

To Pamphilia from the father-in-law of Seralius

Hermophradite in show, in deed a monster

As by thy words and works all men may conster

Thy wrathfull spite conceived an Idell book

Brought forth a foole which like the damme doth look  
 Wherein thou strikes at some mans noble blood  
 Of kinne to thine if thine be counted good  
 Whose vaine comparison for want of witt  
 Takes up the oystershell to play with it

.....

Both frind and foe to thee are even alike  
 Thy witt runns madd not caring who it strike

.....

Thus hast thou made thy self a lying wonder  
 Fooles and their Bables seldome part asunder  
 Work o th' Workes leave idle bookes alone  
 For wise and worthyer women have writte none.<sup>19</sup>

Pamphilia は Wroth を, Seralius は, Lord Denny の娘婿 James Hay のことを示している。この中に見られる Wroth のイメージ——「外見は両性具有—hermophradite [sic] で中身は怪物—monster」に注目したい。Denny は, ものを, とりわけロマンスを書く Wroth を, 男たちはこのようなものと見なすと言うのである。ここにあるのは, 自分の家族のスキャンダルを書かれたことに対する怒りだけではなく, 男の書くことになっているジャンルに手を染める Wroth, つまり男の分野に進出する女性 Wroth へのあからさまな敵対意識である。この hermaphrodite と monster のイメージは, 当時の社会において流行し始めた男の衣装を身につける女性の問題と結び付いているのは言うまでもない。

Linda Woodbridge は, ルネサンス期イギリスにおける hermaphrodite あるいは androgyny のイメージが, プラスからマイナスに転じる過程を, ジェームス朝の effeminate な風潮の中で顕著になってゆく男装する女性が現実になくなったことと関連づけて, 次のように述べている。

The hermaphrodite was sometimes smiled upon in the Renaissance. The formal controversy, partly on the authority of Plato's myth of hermaphrodism in the *Symposium*, had called upon the hermaphrodite image to symbolize the essential oneness of the sexes, adducing the bisexuality of Greek divinities and occasionally even hinting at the early Christian notion that God is androgynous, . . . Numerous literary works in the Renaissance use hermaphrodism for artistic and symbolic purposes, without denouncing it as monstrous: . . . But the Renaissance was also heir to a tradition of fear of and contempt for physical androgyny and transvestism which went back to the Greeks; as Nancy Hayles points out, "Part of the ambivalence of androgyny comes . . . from a contrast between the symbolic and the concrete; what may be admired in the abstract becomes detestable when manifested in the flesh."<sup>20</sup>

いうまでもなく、これは、性を混乱させる衣服の問題に止まるものではなく、異質なものを monster として排除し、marginal なものとして封じ込めようとする社会のありようそのものの関わっているのである。そしてこの hermaphrodite である monster は、ロマンスを書く女性——男性の役割を侵害する女性——に付与されるまさに格好の烙印であった。

ここで Lord Denny の痛烈な悪罵にたいする Wroth の反論の手紙を引用しないのは片手落ちであろう。Wroth は、自分に浴びせられた言葉をそっくりそのまま相手に返すという言葉の冴えを見せる。ここからも彼女の文学的才能だけではない、何物にもひるまない勇敢さを知ることができる。それは、未亡人となってから私生児を産み、夫の残した負債にひるまず立ち向かい、自分を貫きとおした希有なルネサンス女性にふさわしい離れ業であると言えよう。

by Mistress Mary Wrothe

Hirmophradite in sense in Art a monster

As by your railing rimes the world may conster  
Your spitefull words against a harmless booke

Shows that an ass much like the sire doth looke  
Men truly noble fear no touch of blood

Nor question make of others much more good  
Can such comparisons seme the want of witt

When oysters have enflamed your blood with it

.....

Both frind and foe in deed you use alike

And your mad witt in sherry aequall strike

.....

Thus you have made your self a lying wonder

Fooles and their pastimes should not part asunder  
Take this then now lett railing rimes alone

For wise and worthier men have written none<sup>21</sup>

## Part II

### VI

フランスとイタリアでは、Wroth より以前に、女性による世俗的な恋愛詩が書かれ出版されていた。Lyon の裕福な ropemaker の娘であり妻であった Louise Labé の *Euvres* (1555) と Venice の courtesan であった Veronica Franco の *Terze rime* (1575) である。<sup>22</sup> これらを Wroth が読んだ事実は知られていないが、女性が恋愛詩を16世紀の社会的タブーを破って書き始めたという文脈で考えるとき、彼女たちの行為が、共通項を持つのは自明のことであろう。Wroth を含むヨーロッパの女性による恋愛詩と彼女たちの時代における位置を、社会・文化史的コンテクストを押さえながら、しかも明晰なフェミニズム的視点に立って分析している Ann Rosalind



Jones によれば、これらの詩人には、ジェンダーをまたある場合は階級を覆すという呪いの言葉が投げかけられていたことが知られる。Louise Labé を論じた Jones の “City Freedoms, Literary Cross-dressing and the Defense of Women in Louise Labé” (1986) には、次のような興味深い指摘がある。

Her display of learning and her gatherings of high-ranking as highly educated men made her vulnerable to gossip on the part of Lyonnais and foreigners who resented her transgression of social boundaries.

One form this resentment took was an interpretation of Labé as a man-woman : her crossing of class lines seems to have been displaced into a crossing of gender barriers. . . . It was her male contemporaries who laid the stress on her manly qualities. . . Calvin, in a letter attacking the Catholic churchman Gabriel de Saconay, named Labé as one of the prostitutes who wore men's clothes to the prelate's sexual orgies, proof that he was able to “metamorphize women into men.” . . . The social unconscious that takes a woman's public activity as evidence of sexual rule-breaking and interprets both as masculine brings about a curious transformation : it turns a poet whose texts represent her as a highly sexual woman into a man.<sup>23</sup>

比較的自由な都市の空気の中でとはいえ、16世紀に夫以外の男性に向けて、熱烈な愛の詩を書き出版した Labé のような女性が出現したということの持つ意味は大きいですが、我々の注意を引くのは、16世紀フランスの Labé の場合も、17世紀イギリスの Wroth の場合も、「もの一特にロマンスや恋愛詩ーを書き出版する女性」が、本来の性を剥奪されて、「男性あるいは両性具有者」という共通のイメージによって括られていることである。異装や心に浮かぶ思いを紙に定着させて他人に読ませるという行為によって人間に本来的に備わっている性が混乱すると考えられているわけで

はあるまい。社会的ルールへの侵犯が、魔女や錬金術師という日常世界の外にある存在によってではなく、知性を十分すぎるほどに備えた人間—女性—によって引き起こされてゆくことへの恐怖がここにあるはずである。それはもちろん、為政者—男性の側からの社会秩序紊乱への恐怖であり、現在を生きている我々にとっても、遠い歴史の中の事象としてのみ意味を持つのではないことがわかる。だがひとたび女性がものを書くことへの barrier が越えられた時、新しいディスコースが生まれ出る可能性がないとは誰がいいきれであろうか？

## VII

ルネサンス期イギリスにおいて大きな影響を持った sonnet sequence—ソネット連作—は、言うまでもなく Sir Philip Sidney の *Astrophil and Stella* (AS, 1591) である。ソネットは、*Tottel's Miscellany* (1559) の中で、Sir Thomas Wyatt や Henry Howard, Earl of Surrey によって使用され、それ以降のイギリス抒情詩に欠くことのできないジャンルとなってゆくのだが、Sidney の AS によって、1590年代の爆発的ソネット連作ブームが招来する。Samuel Daniel の *Delia* (1592), Henry Constable の *Diana* (1594), Michael Drayton の *Idea* (1594), Thomas Lodge の *Phillis* (1595), Edmond Spenser の *Amoretti* (1595) などをはじめとして、短期間に20あまりにも及ぶ作品が創作された。そして1600年代に入ってから、1590年代の Petrarchan loveをずらした形で書かれたと言ってもよい Shakespeare の *Sonnets* (1609) が出版される。<sup>24</sup>

Arthur F. Marotti が “‘Love is not Love’: Elizabethan Sonnet Sequences and Social Order” (1982) を書き、ルネサンス期イギリス文学に対する新歴史主義解釈の epoch making をなしてからすでに10年以上が経っている。この中で Marotti は、AS が Philip Sidney の創作したものであったという事実がソネット連作ブームの基にあることをまさに的確に見抜いて、それ

を次のように説明している。

The full impact of Sidney's achievement was not really felt until the publication of the poems in 1591, and the phenomenon was not a narrowly literary one. Largely because of his prestige as a martyred culture-hero, Sidney raised the status of sonnets in the hierarchy of genres within the literary system of his time and virtually authorized poets of different social classes to undertake the composition of amorous sequences.<sup>25</sup>

そして Marotti の言葉を借りていえば, love lyric であるソネットは, “competitive environments” に生きる男たちの “realities of suit, service, and recompense” を表わす “common cultural vocabulary” として<sup>26</sup> エリザベス朝において男性詩人たちによりうたわれていったのである。女性を物言わぬ object として切り捨てながら。

また Marotti と同じく新歴史主義の旗手の一人である Louis Adrian Montrose は, “The Elizabethan Subject and the Spenserian Text” (1986) の中で, ソネット連作をはじめとするエリザベス朝文学における “subjectivity” が, 「女性である他者」との関係において Petrarchan persona として発現することを次のように述べている。

Petrarchism is one of the discourses in which a recognizably modern mode of subjectivity—an introspective egocentricity founded upon the frustration and sublimation of material desires—is first articulated and actively cultivated. The Petrarchan persona is a distinctly masculine subject explicitly fashioned in relation to a feminine other. . . . The Petrarchan lover worships a deity of his own making and under his own control; he masters his mistress by inscribing her within his text, where she is repeatedly put together and taken apart—and, sometimes, killed.<sup>27</sup>

ここで言及されている“subjectivity”には、女性が含まれていないのは言うまでもない。

筆者は、Lady Mary Wroth の *Pamphilia to Amphilanthus* を検討する際には、ルネサンス期イギリスのソネット連作を Marotti や Montrose の新歴史主義解釈の文脈で捉え、そこにジェンダーの視点を付け加えながら読んでゆくことが必要であると考ええる。そのとき、問いは次のようになる：この *PA* において、男性詩人の占めていた位置を自らのものとした詩人であり、恋する女性 Pamphilia は、“subjectivity”を獲得しえたであろうか。もしそうだとすれば、それは「男性である他者」との関係の中で現れてくるものなのか。<sup>28</sup> これらを念頭に置きながら、ソネットの考察にかかることにする。

## VIII

Lady Mary Wroth のソネット連作 *Pamphilia to Amphilanthus* は、親しい友人たちの間で manuscript のかたちで読まれていた。Wroth は、1613年頃には既に詩を書いていたと言われているが、それらのうち彼女自らの書き込みや訂正の多くある manuscript には110あまりの詩が、また、*Urania* とともに1621年に出版された version には83のソネットと20のソングが含まれている。<sup>29</sup> 現存しているこれらのふたつの version には、それゆえ、かなりの相違が見られ、Wroth が書きためた詩を、ある目的のために整理し秩序だてたことが知られる。

このソネットの語り手であり、愛の詩の創作者 Pamphilia は、“all-loving”を意味し、彼女の恋人 Amphilanthus は、“lover of two”を表わしている。<sup>30</sup> Wroth は *Urania* の中でも、この名前を持つ二人の主人公を登場させている。同じ名前の二人がソネット連作の中にも設定されているのは、二つの異なるジャンルの作品を一つの大きなまとまりの中で考えてい

たことの証明になると思われるが、今回は *Urania* を取り上げないので、このソネット連作を独立した作品として検討してゆくことにする。<sup>31</sup>

どのソネット連作においても冒頭の詩は、全体の方向づけをする重要な意味を持つ。*PA* でも例外ではなく、主人公で語り手の lover としての誕生がソネット 1 で示されている。Pamphilia は、夜の眠りの中で “wing'd desire” の引く “Chariot” に愛の女神 “Venus” とその息子 “Cupid” が乗っているのを見る。“Venus” は腕に高々と燃えさかる心臓を掲げていて、それを彼女の胸に入れ、“Cupid” にそれを射るように命じる。そして彼の矢に心臓を射られた Pamphilia は、それ以来 “lover”(「愛する者」) となったのである。

When nights black mantle could most darknes prove,  
 And sleepe deaths Image did my senceses hie  
 From knowledg of my self, then thoughts did move  
 Swifter then those most swiftnes need require :  
 In sleepe, a Chariot drawne by wing'd desire  
 I sawe: wher sate bright Venus Queene of love,  
 And att her feete her sonne, still adding fire  
 To burning hearts which she did hold above,  
 Butt one hart flaming more then all the rest  
 The goddess held, and putt itt to my brest,  
 Deare sonne, now shutt sayd she : thus must wee winn ;  
 Hee her obay'd, and martir'd my poore hart,  
 I, waking hop'd as dreames itt would depart  
 Yett since : O mee : a lover I have binn. (P1) <sup>32</sup>

1590年代のソネット連作の冒頭の詩がほとんど例外なく、男性詩人の女性に対する愛—そしてそれは、自らのペンの力による女性の fabrication なのだが—をうたっているのとは対照的に、ここでは、女性詩人が、男性

との関係に全く言及していないことがみてとれよう。<sup>33</sup> Pamphilia の関心は、ひたすら自分自身の心のありよう—愛の矢を射られ傷つき殺された心臓—に集中している。彼女と関係を持つ相手、言葉を変えて言えば、彼女の subjectivity が発現するための他者は、Amphilanthus ではなく Cupid なのである。

ここから明らかになることを要約すると次のようになる。すなわち、このソネット連作は、枠組みとしては男性と女性の間を逆転させた Petrarchan love を使用しているが、そのディスコースの中心は詩人(女性)と恋人(男性)の関係ではなく、Pamphilia の Cupid により傷つけられた心——すなわち女性の中に生まれ得る愛そのもの——の探求なのだと。そして、これ以後のソネットの中で Pamphilia は、恋人 Amphilanthus よりむしろ Cupid との間を中心にして、自らの愛の実相を明らかにしてゆくのである。言うまでもなく、Cupid は人間の心の中に住みついている存在であることから、Pamphilia の愛の探求は、自らの内面の探求にはかならない。

Pamphilia の心を征服する Cupid は、PA において、二つの姿を見せる。一つは、Anacreontic な幼い子供である “The wanton child” (P64), “Love a child” (P74) として、またもう一つは、“court of Love” に君臨する成熟した君主として。幼い Cupid は、いたずら好きで Pamphila を騙すいかさま師 “jugler” (P64) として現われたり、森の中で迷子になり、寒さに震え泣き叫んでいる幼子 “Colde, wett, and crying hee had lost his way, / And beeing blind was farder like to stray:” (P96) として表わされたりしているが、ソネット連作全体を眺めてみると、愛の探求のテーマにより深い関係をもつのは、成熟した Cupid の方である。

この大人の Cupid は、PA の中心的グループである、“crown” あるいは “corona” と呼ばれる14のソネット (P77-90) の中で、集中的に提示されている。“crown” あるいは “corona” というのは、ひとつのソネットあるいはス

タンザの最後の行が次のソネットの初めの行となるイタリアの詩型で、Sir Philip Sidney が *Old Arcadia* で使用したのがイギリスにおける早い例であった。<sup>34</sup>

ソネットの行数と同じ14のグループから成る“crown”は、タイトルを *A Crowne of Sonetts dedicated to Love* として持ち、この中で Pamphilia は、Cupid の矢に射られて不平をのべる犠牲者としてよりもむしろ、“court of Love”に君臨する Cupid を崇める女性として描かれている。成熟した男性である Cupid に魅入られた Pamphilia の愛はそれゆえ、底知れぬ深さを持つことになる。この愛に捉われ、行き暮れた Pamphilia の姿は、“crown”の冒頭のソネットの“labourinth”(「迷路」)のイメージに凝縮されている。

In this strang labourinth how shall I turne?  
 Wayes are on all sids while the way I miss :  
 If to the right hand, ther, in love I burne ;  
 Lett mee goe forward, thein danger is ;  
 If to the left, suspition hinders bliss,  
 Lett mee turne back, shame cries I ought returne  
 Nor fainte though crosses with my fortunes kiss ;  
 Stand still is harder, allthough sure to mourne ;  
 Thus lett mee take the right, or left hand way ;  
 Goe forward, or stand still, or back retire ;  
 I must thes doubts indure with out allay  
 Or help, butt traveile find for my best hire ;  
 Yett that which most my troubled sence doth move  
 Is to leave all, and take the thread of love. (P77)

出口の見えない愛の迷宮に閉じ込められて思い悩み、とるべき進路をきめかねている Pamphilia の姿は、男性詩人が作るソネットの中の“Petrarchan persona”とは異なる subject の発現であると言えるであろう。

“Petrarchan persona” は、自分の愛の報われぬ苦しみをうたってはいるが、それは、Marotti や Montrose が示した通り、純粹に個人的な愛ではなく、愛をうたうことの意味を計算し尽くした詩人が見せるいわば戦略的な愛のポーズとでも言えるものであった。だがこのソネットにおける愛は、そのような思惑を切り捨てた所に生まれる、密やかな愛である。それは、ひたすら詩人の胸の中のドラマとして内面化されている愛である。Pamphilia は、この迷路を “thread of love” を頼りに進む。この糸の行き着く先が、出口につながることを信じて。

“crown” の二番目のソネットでは、この “thread of love” が、“soules content” へ導かれてゆき、愛の真実が明らかにされるさまが語られる。

Is to leave all, and take the thread of love  
 Which line strait leads unto the soules content  
 Where choyse delights with pleasures wings doe move,  
 And idle phant'sie never roome had lent,  
 When chaste thoughts guide us then our minds are bent  
 To take that good which ills from us remove,  
 Light of true love, brings fruit which none repent  
 But constant lovers seek, and wish to prove;  
 Love is the shining star of blessings light;  
 The fervent fire of zeal, the root of peace,  
 The lasting lamp fed with the oil of right;  
 Image of faith, and womb for joyes increase.  
 Love is true vertu, and his end delight;  
 His flames are joyes, his bands true lovers might. (P78)

9-14行で描かれている愛の姿は、もちろん成熟した Cupid のことである。彼は、“the shining star of blessings light”（「祝福された光りに輝く星」）であり、“faith”（「真実」），“true vertu”（「徳」），“joyes”（「喜び」）に満



ちた燃えあがる白熱した炎である。宗教的なイメージに包み込まれた Cupid という存在は oxymoronic であるが、これを「純度の高い愛」の側面を伝えるためのレトリックであると考えたい。

このソネットで描かれている昇華され、純化された愛の実相は、P84の中でも取り上げられている。

The worth of love, wher endles blessednes  
 Raines, and commands, maintaind by heavnly fires  
 Made of vertu, join'de by truth, blowne by desires  
 Strengthned by worth, renued by carefullnes  
 Flaming in never changing thoughts, briers  
 Of jelousie shall heere miss wellcomnes ; (P84, ll.3-8)

ここからわかるように、愛は、“Flaming in never changing thoughts”(「変わる事のない思いの炎」)となって燃え上がり、“heavnly fires”(「この世ならぬ天上の火」)となると詩人は語る。Pamphilia の愛はこのように、自分の愛の対象を持たぬまま、静かにしかし激しく心を覆いつくしてゆくのである。彼女は、みずからの裡にある “lord commander of all harts, / Ruller of owr affections kinde, and just / Great King of Love”(P89, ll.9-11)である Cupid のみを凝視している。

“crown” の最後のソネットは、この愛に灼かれる詩人の次のような問いかけで終わる。“Soe though in Love I fervently doe burne, / In this strange labourinth how shall I turne?” (P90, ll.13-14) 14行目の言葉ははじめのP77の1行目へとつながり、crown”を構成する14のソネット全体が愛の無限循環を繰り返す事になるのである。これが悪夢なのかそれとも愛の勝利なのかは、ここでは問うまい。ただ、閉じた空間—人間の心—愛の糸—燃えさかる白熱した炎—という連想をルネサンス期イギリスというコンテクストの中で考えるとき、従来のようなジェンダーを抜きにした議論には限界が

あるということだけを指摘しておく。Jeff Masten の “Circulation, Gender, and Subjectivity in Wroth’s Sonnets” (1991) は、このことを極めて鋭利な切り口で論じた、示唆に富むエッセイである。<sup>35</sup>

## IX

今まで見てきた “crown” を構成するソネット以外にも、passion の激しさを扱うものがある。例えば、P41は、これを極めて明確に示している詩としてあげられよう。

How well poore hart thou wittnes canst I love,  
 How oft my griefe hath made thee shed forth teares  
 Drops of thy deerest blood, and how oft feares  
 Borne testimony of the paines I prove,  
 What torments hast thou sufferd while above  
 Joy, thou tortur’d wert with racks which longing beares  
 Pinch’d with desires which yett butt wishing reares  
 Firme in my faith, in constancy to move,  
 Yett is itt sayd that sure love can nott bee  
 Wher soe small showe of passion is descried,  
 When thy chiefe paine is that I must itt hide  
 From all save only one who shoulde itt see.  
 For know more passion in my hart doth move  
 Then in a million that make show of love. (P41)

ここでは、拷問にかけられても愛を揺るがさない心が描かれていて、自己の奥底に存在する外にはあまり現われてこない情念が、大多数の人間の  
 大袈裟な愛の見せびらかしより真の愛であることが強調されている。  
 “passion in my hart” を抱えて限りなく内部に向かう Pamphilia は、自分を  
 このように捉えて離さない愛の情念の意味を確かにつかみたいという希い

に駆られている女性の姿なのである。

このP41の13-14行で表わされている語り手の真実と、それとは無関係のまた無責任な人々の見せかけの態度の対比は、*PA* を貫通している「愛の内面化」の一つの極にあるものである。この対比は、P26の宮廷での活動的な楽しみにふける人々と、自分の心の中に沈潜してものを考えている Pamphilia との対比によっても明らかである。

When every one to pleasing pastime hires  
 Some hunt, some hauke, some play, while some delight  
 In sweet discourse, and musique shoves joys might  
 Yett I my thoughts doe farr above thes prise.  
 The joy which I take, is that free from eyes  
 I sitt, and wonder att this daylike night  
 Soe to dispose them-selves, as voyd of right ;  
 And leave true pleasure for poore vanities ;  
 When others hunt, my thoughts I have in chase ;  
 If hauke, my minde att wished end doth fly,  
 Discourse, I with my spiritt tauke, and cry  
 While others, musique choose as greatest grace.  
 O God, say I, can thes fond pleasures move?  
 Or musique bee butt in sweet thoughts of love? (P26)

我々はこの詩を、Queen Anne の宮廷からの Wroth の追放という文脈で読むと同時に、*PA* のテーマである、愛をそれ本来の持つ意味において考えるという企ての一部として読むことを求められている。他の人々が、“hunt” (「狩猟」), “hauke” (「鷹狩り」), “sweet discourse” (「楽しい会話」), “musique” (「音楽」) などで時間を費やしているとき、Pamphilia は、彼女の心の中の “thoughts” (「物思い」) をなにより貴重とみなし、“I with my spiritt tauke” (「私は魂と対話する」) のである。この心の地図には、現実の恋

人 Amphilanthus ではなく、自らうみだした愛の神 Cupid が書き込まれていることは言うまでもなく明らかであろう。

この PA 全体のテーマとの関連でいうとクライマックスであるソネットは、P48である。そこでは、“I, ame”という言葉の繰り返しを使用しながら、愛の虜になっている自分の姿を自らにまた広く他の人々に刻印してゆく Pamphilia——詩人であり恋人であり、またなによりも女性である存在——がいる。そしてここには、ルネサンス期イギリスにおける男性詩人によって書かれたソネット連作の中の、詩人であり恋人である “Petrarchan persona” とは確実に異なるディスコースを操る subject の誕生が見られると言い切っても、誤りではあるまい。

If ever love had force in humaine brest?  
 If ever hee could move in pensive hart?  
 Or if that hee such powre could butt impart  
 To breed those flames whose heat brings joys unrest.  
 Then looke on mee ; I ame to thes adrest,  
 I, ame the soule that feeles the greatest smart ;  
 I, ame that hartles trunk of harts depart  
 And I, that one, by love, and grieffe oprest ;  
 Non ever felt the truth of loves great miss  
 Of eyes, till I deprived was of bliss ;  
 For had hee seene, hee must have pittie show'd ;  
 I should nott have bin made this stage of woe  
 Wher sad disasters have theyr open showe  
 O noe, more pittie hee had sure beestow'd. (P48)

Lady Mary Wroth は、ルネサンス期イギリスの文学キャノンである Sidney 家の一員であるという強い意識を持っていた。Sir Philip Sidney の *Astrophil and Stella* は、男性詩人にだけでなく、女性である Wroth にとっ

でも、自らの力量を試してみたいという意欲をそそられる見事なモデルであった。だが、このソネット連作をはじめとして数多く作られていったソネット連作は、男女の愛をうたうという最も秘めやかな行為が、額面通りの意味を持たない世界を内包していたのである。Wroth は、このソネット連作という lyric form を使いながら、そこに示されている object としての女性を、subject としての女性へと転換しながら、愛を今一度、政治や権力の世界から切り離してうたうことを試みた。それは、未亡人でありながら実の従兄弟の子供を産み、亡夫の借金にくるしみながらも自立して生きようと願った、ルネサンス期イギリスを生きた女性の真実の声だったのではないだろうか。<sup>36</sup>

### Notes

本稿を書くに当たっての多くの情報は、Lady Mary Wroth, *The Poems of Lady Mary Wroth*, ed. Josephine A. Roberts (Baton Rouge and London : Louisiana State University Press, 1983) の中の “The Life of Lady Mary Wroth” と Naomi J. Miller and Gary Waller eds., *Reading Mary Wroth : Representing Alternatives in Early Modern England* (Knoxville : The University of Tennessee Press, 1991) の中の次の三つのペイパーに基づいている。Naomi J. Miller and Gary Waller, “Introduction : Reading as Re- Vision”; Margaret P. Hannay, “‘Your Vertuous and Learned Aunt’: The Countess of Pembroke as a Mentor to Mary Wroth”; Gary Waller, “Mary Wroth and the Sidney Family Romance : Gender Construction in Early Modern England”; また Katharina M. Wilson ed., *Women Writers of the Renaissance and Reformation* (Athens : The University of Georgia Press, 1987) の中の Margaret Patterson Hannay, “Mary Sidney : Lady Wroth” も短いながら手際よく Wroth の生涯をまとめているので利用した。ここ数年、英米の研究者達 (特に女性研究者達) の間で Lady Mary Wroth に対する関心が高まっているが、その作品を論ずるペイパーの中で彼女の生涯に触れている部分は、ほとんど J. A. Roberts の “The Life” に基づいていた。しかし上記の *Reading Mary Wroth* の出版が、Wroth の生涯を新しい角度から見直す契機をなしたので、これを踏まえた伝記の出版が待たれる。テキストは、前記の Roberts のものを使用した。

1. Wroth, *Poems*, p. 19.

2. Wroth, *Poems*, pp. 18-19.

3. これは、多くの批評家によって語られているが、1587年にスペインのロマンスを訳した Margaret Tyler の *Epistle to the Reader* を読めば、ロマンスを送り出す側の女性が、どのような覚悟を持たなければならなかったのかが理解できる。小柳康子、「英文学読み直し (1)—Margaret Tyler と Jane Anger—」(『調布学園女子短期大学紀要』第25号、1992) 参照。
4. Wroth の *The Countess of Mountgomerie's Urania* は、1621年に出版された第一部と manuscript の形でのみ残っている第二部がある。J. A. Roberts によって *Urania* の二部からなる full edition の出版準備がされているといわれているが、筆者はこれをまだ入手していない。*Urania* におけるジェンダーの問題については、Naomi J. Miller による女性の友情とコミュニティの面からの、また Helen Hackett によるロマンスの読者である女性と作者である男性という役割分化の中で、Wroth がこのジャンルに女性として ambivalent な取り組みをしたことを考察している興味深い論考がある。Naomi J Miller, "Not much to be marked': Narrative of the Woman's Part in Lady Mary Wroth's *Urania*", *SEL* 29 (1989); Helen Hackett, "Yet Tell Me Some Such Fiction': Lady Mary Wroth's *Urania* and the 'Femininity' of Romance", in *Women, Texts & Histories 1575-1760*, eds. Clare Brant & Diane Purkiss (London and New York: Routledge, 1992).
5. Wroth, *Poems*, p. 6.
6. Ronald Strickland, "Pageantry and Poetry as Discourse: The Production of Subjectivity in Sir Philip Sidney's Funeral", *ELH* 57 (1990), p. 33.
7. Mary Sidney, Countess of Pembroke もこの「英文学読み直し」の中で取り上げる必要のある女性である。その時の切り口の一つは、ここで考えている Lady Mary の mentor としての役割になるのは言うまでもないであろう。Gary Waller は *English Poetry of the Sixteenth Century* において Countess のサークルを次のように書いている。"In 1577 Mary Sidney married Henry, second Earl of Pembroke, and her home at Wilton became for some twenty years the centre of Sidney's attempt to give direction to Elizabethan high culture. Growing from informal gatherings of Sidney's friends and admirers at Wilton and elsewhere, after Sidney's death the Circle became centred on the Countess's attempt to continue her brother's ideals. Within the work of the Circle, its achievements and limitations alike, we can see a mixture of both residual and emergent cultural forms and practices, some of which look nostalgically back to medieval chivalric ideals and courtly practices, while others are struggling to articulate the emergent values by which a new phase of English culture was taking shape." Gary Waller, *English Poetry of the Sixteenth Century* (London and New York: Longman, 1986), p. 157.

また, Countess of Pembroke の mentor としての役割は, Margeret P. Hannay によって, *Reading Mary Wroth* の中でも論じられている。

8. Wroth, *Poems*, p. 7.
9. Ben Jonson や彼の友人 William Drummond などによる dedication がこれを証明していることが Josephine A. Roberts の “The Life of Lady Mary Wroth” で述べられている。 “In his collection of epigrams (ciii), Jonson further called attention to her family heritage as a Sidney and affirmed that she lived up to the name. In a second, longer epigram (cv), he insisted on Lady Mary’s role as a model woman who served as “Natures Index” and noted that when “drest in shepherds tyre, who would not say : / You were the bright Oenone, Flora, or May?” (ll. 9-10). *Wroth*, p. 16.
10. Wroth, *Poems*, p. 7.
11. Wroth, *Poems*, p. 10.
12. Wroth, *Poems*, p. 11.
13. Marion Wynne-Davies, “The Queen’s Masque : Renaissance Women and the Seventeenth-Century Court Masque”, in S. P. Cerasano and Marion Wynne-Davies, eds., *Gloriana’s Face : Women, Public and Private, in the English Renaissance* (New York : Harvester Wheatsheaf, 1992), p. 90.
14. Linda Woodbridge, *Women and the English Renaissance : Literature and the Nature of Womankind, 1540-1620* (Urbana and Chicago : University of Illinois Press, 1986), p. 178. この問題は, Gary Waller によって *Reading Mary Wroth* の中のエッセイでも考察されている。Waller は特に, Wroth の sexual autonomy が彼女の属する class への言及なしには論じられないことに我々の注意を喚起している。Waller, “Mary Wroth and the Sidney Family Romance”, pp. 48-52.
15. *Urania* の出版が, 経済的理由に拠るのではないかという説明は Margaret Patterson Hannay をはじめ幾人かの研究者の想像している理由だが, モデル問題が発生したとき Wroth のとった態度は, この推測を必ずしも裏付けるものではない。だがもし出版が経済的理由によるとすれば, Wroth にはもうひとつ「イギリスで最初の」という言葉が冠せられることになる。Margaret Patterson Hannay, “Mary Sidney : Lady Wroth”, Katharina M. Wilson ed., *Women Writers of the Renaissance and Reformation* (Athens, Georgia : the University of Georgia Press, 1987), p. 551.
16. Helen Hackett, “‘Femininity’ of Romance”, p. 46.
17. Wroth, *Poems*, pp. 31-37.
18. Wroth はこの騒動の際, James I の友人で有力者である Duke of Buckingham に手紙を書き, *Urania* 出版には, 自分が関わっていないことを述べているが, これと自分に対する非難への反撃の言葉の間にある不一致が, ルネサンス期イ

ギリスでものを書く女性の置かれた立場を鮮明にしている。Wroth, *Poems*, p. 35.

19. Wroth, *Poems*, p. 33.
20. Linda Woodbridge, *Women and the English Renaissance*, pp. 140-141.
21. Wroth, *Poems*, pp. 34-35.
22. Ann Rosalind Jones, "City Women and Their Audiences: Louise Labé and Veronica Franco" in *Rewriting the Renaissance: The Discourses of Sexual Difference in Early Modern Europe*, eds., Margaret W. Ferguson, Maureen Quilligan and Nancy J. Vickers (Chicago and London: the University of Chicago Press, 1986), pp. 299-316.
23. Ann Rosalind Jones, "City Freedoms, Literary Cross-dressing and the Defense of Women in Louise Labé", pp. 3-4. これは1988年9月29日に Harvard 大学の CLCS (Center for Literary and Clutural Studies) で discuss されたペイパーである。Ann Jones のメンバーへの note は以下のようにになっている。

Dear Women in the Renaissance seminar members,

Here's my paper on Louise Labé (a condensed chapter from a ms. entitled *Negotiating Eros: Women's Love Lyric in France, Italy and England, 1544 to 1621*, now in the hands of Indiana UP) and three pages of her sonnets, for our September 29th meeting (Center for Literary Studides, 7:30)....

ここで言及されている *Negotiating Eros: Women's Love Lyric in France, Italy and England 1544 to 1621* は、タイトルを少し変えて *The Currency of Eros: Women's Love Lyric in Europe, 1540-1620* として1990年に Indiana University Press から出版されているが、筆者はこれをまだ入手していない。

Ann Rosalind Jonesは、Louise Labé, Veronica Franco, Pernette du Guillet についてこのペイパー以外に次のところで考察している。

Ann Rosalind Jones, "Assimilation with a Difference: Renaissance Women Poets and Literary Influence", *Yale French Studies* 62 (1981): pp. 135-53.

24. Shakespeare の *Sonnets* が、男性から男性へ呼びかけられていることは、ソネット連作を Petrarchan love の伝統の中で考えるとき、興味ある問題を提起することになる。
25. Arthur F. Marotti, "'Love is not Love': Elizabethan Sonnet Sequences and Social Order", *ELH* 49 (1982), p. 397.
26. Marotti, "Love is not Love", p. 398.
27. Louis Adrian Montrose, "The Elizabethan Subject and the Spenserian Text" in *Literary Theory / Renaissance Texts*, eds., Patricia Parker and David Quint



- (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1986), p. 324.
28. Waller も “The Sidney Family Romance” において, Wroth の Petrarchan sequence の書き直しに, Pamphilia の subject としての発現をみているが, 彼の議論は, 精神分析的に行われている。すなわち, Petrarchan love に内包する女性の passivity が Wroth によって明らかな masochistic edge を与えられていることに, Petrarchan love の覆しを見ようとしているのである。 “Wroth’s Pamphilia marks a breach in such a pattern. She is not merely fixed by the gaze but turns it to an active and defiant exhibitionism. She has started to reappropriate herself as a subject.” (p. 56)
  29. Wroth, *Poems*, pp. 42-44.
  30. Wroth, *Poems*, p. 42.
  31. 英米の研究者達による *Urania* と *PA* の研究でも, これらをひとつのまとまりにおいて論考しているものは, 筆者の知る限りでは見当たらない。
  32. ソネットの番号は, Josephine A. Roberts 編の *The Poems of Lady Mary Wroth* に従っている。この Collected Poems は, Wroth の *Urania* や *Love’s Victorie* の中の詩も含んでいるため, P, U などのマークがつけられている。
  33. Sir Philip Sidney の *Astrophil and Stella* は, Stella への愛をいかに詩に書くかに悩む詩人の姿から始まっている: “Loving in truth, and faine in verse my love to show” (l. 1); Samuel Daniel の *Delia* の詩人は, 愛を書いた自分のソネットを女性に読むように勧めてこう語る: “Examine well thy beauty with my truth, / And cross my cares ere greater sums arise. / Read it, sweet maid, though it be done but slightly (ll. 11-13); この他のソネット連作でも, 冒頭の詩はみな詩人から女性への呼びかけで始まっている。
  34. Wroth, *Poems*, p. 127.
  35. Jeff Masten は, *PA* における Pamphilia の世界を, public で male なものを拒絶した private であると同時に privative なものであるとし, この中から発現する female subjectivity を, ルネサンス期イギリスにおいて, 自らの書きものを circulate することを拒否する Wroth と重ね合わせて論じている。そして彼は, publish することによって private な世界を示さなければならない female discourse のパラドックスを, 次のように指摘している。 “If a woman writes in a forest (or garden) and no one reads her, has she written anything? Wroth, as a woman-writer, must resist publication as a form of male trafficking, yet that resistance can only register if it is made public.” (83) Jeff Masten, “‘Shall I turne blabb?’: Circulation, Gender, and Subjectivity in Mary Wroth’s Sonnets”, in Naomi J. Miller and Gary Waller eds., *Reading Mary Wroth: Representing Alternatives in Early Modern England* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1991), pp. 67-87.

36. Lady Mary Wroth の生涯と彼女の *Pamphilia to Amphilanthus* をここまで書いてきたが、本論の整合性をもたせるために、触れることのできなかった問題も多くあることを断っておきたい。また筆者の勉強不足のために、はっきりと言及できなかった事柄もある。例えば、ルネサンス期イギリスにおける class の問題が全く抜け落ちている。Wroth が未亡人で私生児を生んだことは、多分下層階級、中流階級の同じ行為をした女性とは、異なる意味合いを持っていたであろう。ものを書き、それを出版するという行為も同様である。; Sidney myth は William Pembroke や Robert Sidney との関係をも視野に入れて、さらに具体的に考察することが必要である; *PA* の解釈は、*Pamphilia* の constancy と *Amphilanthus* の inconstancy を軸に見ることも必要である; これらは、この先しばらくルネサンス期イギリスにおける「女性の書きもの」を読み続けてゆく中で考えてみたい。

### Bibliography

- Alpers, Paul J., ed. *Elizabethan Poetry: Modern Essays in Criticism*. London, Oxford and New York: Oxford University Press, 1967.
- Bray, Alan. *Homosexuality in Renaissance England*. 1982. 田口孝夫・山本雅男訳著『同性愛の社会史——イギリス・ルネサンス——』東京: 彩流社, 1993.
- Cady, Joseph. "Renaissance Awareness and Language for Heterosexuality: 'Love' and 'Feminine Love'". In *Renaissance Discourses of Desire*, ed. Claude J. Summers and Ted-Larry Pebworth, 143-158. Columbia and London: University of Missouri Press, 1993.
- Daniel, Samuel. *Delia*. In *Elizabethan Sonnet-Cycles*, ed. Martha Foote Crow. 1897. Reprint. New York: AMS Press, 1969.
- Drayton, Michael. *Idea*. In *Elizabethan Sonnet-Cycles*, ed. Martha Foote Crow. 1897. Reprint. New York: AMS Press, 1969.
- Guibbory, Ashsah. "Sexual Politics/Political Sex: Seventeenth-Century Love Poetry". In *Renaissance Discourses of Desire*, ed. Claude J. Summers and Ted-Larry Pebworth, 206-222. Columbia and London: University of Missouri Press, 1993.
- Hackett, Helen. "'Yet Tell Me Some Such Fiction': Lady Mary Wroth's *Urania* and the 'Femininity' of Romance." In *Women, Texts and Histories 1575-1760*, eds. Clare Brant and Diane Purkiss, 39-68. London and New York: Routledge, 1992.
- Hannay, Margaret Patterson. "Mary Sidney: Lady Wroth". In *Women Writers of the Renaissance and Reformation*, ed. Katharina M. Wilson, 548-565. Athens and London: The University of Georgia Press, 1987.
- . "'Your vertuous and learned Aunt': The Countess of Pembroke as a Mentor to Mary Wroth". In *Reading Mary Wroth: Representing Alternatives in Early*

- Modern England*, eds. Naomi J. Miller and Gary Waller, 15-34. Knoxville : The University of Tennessee Press, 1991.
- Jones, Ann Rosalind. "Assimilation with a Difference : Renaissance Women Poets and Literary Influence". *Yale French Studies* 62 (1981): 135-53.
- . "City Women and Their Audiences : Louise Labé and Verocia Franco". In *Rewriting the Renaissance : The Discourses of Sexual Difference in Early Modern Europe*, eds. Margaret W. Ferguson, Maureen Quilligan and Nancy J. Vickers, 299-316. Chicago and London : The University of Chicago Press, 1986.
- . "City Freedoms, Literary Cross-dressing and the Defense of Women in Louise Labé". manuscript, 1988.
- . "Designing Women : The Self as Spectacle in Mary Wroth and Veronica Franco". In *Reading Mary Wroth : Representing Alternatives in Early Modern England*, eds. Naomi J. Miller and Gary Waller, 135-153. Knoxville : The University of Tennessee Press, 1991.
- Kay, Dennis. "Sidney's Reputation, 1580-1945 ; Introduction : Sidney — A Critical Heritage". In *Sir Philip Sidney : An Anthology of Modern Criticism*, ed. Dennis Kay, 3-41. Oxford : Clarendon Press, 1987.
- 小柳康子. *Sidney's Astrophil and Stella : An Experimental Reading*. 『調布学園女子短期大学紀要』 23(1990): 91-108.
- . 「英文学読み直し (1) — Margaret Tyler と Jane Anger —」 『調布学園女子短期大学紀要』 25(1992): 169-206.
- Krontiris, Tina. *Oppositional Voices : Women as Writers and Translators of Literature in the English Renaissance*. London and New York : Routledge, 1992.
- Lever, J. W. *The Elizabethan Love Sonnet*. London : Methuen & Co. Ltd., 1956.
- Marotti, Arthur F. "'Love is not Love': Elizabethan Sonnet Sequences and Social Order". *ELH* 49(1982): 396-428.
- Masten, Jeff. "'Shall I turne blabb?': Circulation, Gender, and Subjectivity in Mary Wroth's Sonnets". In *Reading Mary Wroth : Representing Alternatives in Early Modern England*, eds. Naomi J. Miller and Gary Waller, 67-87. Knoxville : The University of Tennessee Press, 1991.
- Miller, J. Naomi. "'Not much to be marked': Narrative of the Woman's Part in Lady Mary Wroth's *Urania*". *SEL* 29(1989): 121-137.
- . "Rewriting Lyric Fictions : The Role of the Lady in Lady Mary Wroth's *Pamphilia to Amphilanthus*". In *The Renaissance Englishwoman in Print : Counterbalancing the Canon*, eds. Anne M. Haselkorn and Betty S. Travitsky, 295-310. Amherst : The University of Massachusetts Press, 1990.
- Montrose, Louis Adrian. "The Elizabethan Subject and the Spenserian Text". In *Liter-*

- ary Theory / Renaissance Tests*, eds. Patricia Parker and David Quint, 303-40. Baltimore and London : The Johns Hopkins University Press, 1986.
- Neely, Carol Thomas. "The Structure of English Renaissance Sonnet Sequences". *ELH* 45 (1978): 359-89.
- . "Constructing the Subject : Feminist Practice and the New Renaissance Discourses". *English Literary Renaissance* 18 (1988): 5-18.
- Sidney, Sir Philip. *The Poems of Sir Philip Sidney*, ed. William A. Ringler, Jr., Oxford : At the Clarendon Press, 1962.
- . *The Countesse of Pembrokes Arcadia*, ed. Albert Feuillerat. Cambridge : At the University Press, 1965.
- . *An Apology for Poetry*, ed. Forrest G. Robinson. New York : Macmillan Publishing Company, 1985.
- Smith, Hallett. *Elizabethan Poetry: A Study in Conventions, Meaning, and Expression*. Cambridge : Harvard University Press, 1952.
- Strickland, Ronald. "Pageantry and Poetry as Discourse : The Production of Subjectivity in Sir Philip Sidney's Funeral". *ELH* 57 (1990): 19-36.
- Swift, Carolyn Ruth. "Feminine Identity in Lady Mary Wroth's Romance *Urania*." *English Literary Renaissance* 14 (1984); Reprint. In *Women in the Renaissance : Selections from English Literary Renaissance*, eds. Kirby Farrell, Elizabeth H. Hageman, and Arthur F. Kinney, 154-174. Amherst : The University of Massachusetts Press, 1988.
- Sylvester, Richard S., ed. *English Sixteenth-Century Verse : An Anthology*. New York and London : W · W · Norton & Company, 1984.
- Waller, Gary. *English Poetry of the Sixteenth Century*. London and New York : Longman, 1986.
- . "The Countess of Pembroke and Gendered Reading". In *The Renaissance Englishwoman in Print: Counterbalancing the Canon*, eds. Anne M. Haselkorn and Betty S. Travitsky, 327-45. Amherst : The University of Massachusetts Press, 1990.
- . "Introduction : Reading as Re-Vision". In *Reading Mary Wroth : Representing Alternatives in Early Modern England*, eds. Naomi J. Miller and Gary Waller, 1-12. Knoxville : The University of Tennessee Press, 1991.
- . "Mary Wroth and the Sidney Family Romance ; Gender Construction in Early Modern England". In *Reading Mary Wroth : Representing Alternatives in Early Modern England*, eds. Naomi J. Miller and Gary Waller, 35-63. Knoxville : The University of Tennessee Press, 1991.
- Woodbridge, Linda. *Women and the English Renaissance : Literature and the Nature of*

- Womankind, 1540-1620*. Urbana and Chicago : University of Illinois Press, 1984.
- Wroth, Lady Mary. *The Poems of Lady Mary Wroth*, ed. Josephine A. Roberts. Baton Rouge and London : Louisiana State University Press, 1983.
- Wynne- Davies, Marion. "The Queen's Masque: Renaissance Women and the Seventeenth-Century Court Masque". In *Gloriana's Face : Women, Public and Private, in the English Renaissance*, eds. S. P. Cerasano and Marion Wynne-Davies, 79-104. New York : Harvester Wheatsheaf, 1992.
- Yates, Frances A. *Astraea : The Imperial Theme in the Sixteenth Century*. London and Boston : Ark Paperbacks, 1975.